

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

はじめて逮捕されました 横堀幸司 2

山がない(3) 卷上公一 22

ワープロ筆談・第2弾 8

料理がすべて 田川律 24

私のベスト10——一九八六年下半期 津野海太郎 14

「カフカ」ノート 高橋悠治 28

キリコのコリクツ 玖保キリコ 19

走る・その十一 デイヴィッド・グッドマン 30

はじめで逮捕 されました 横堀幸司

あー、ほんとに凄く国際化して来た時代だな。水牛のはちまきさんはフィリピンだと言うし、日教組の小夜子さんは有給休暇使い捨て文の為ベネチアを散策すると言うし、渾大防は腰の下

今結果から言えば、木下さんはこの新作で、自己の遺言まがいの、悲痛な老人問題の秀作を世に贈りましたが、このミーティングの時は撮影の真最中、ぼくは「花のチーフ助手」(?)として決して勝つ事のない戦いに参戦を強いられていたのです。「大ヒット間違いないですよ。なんてったって、題名がいいもんねえー。リメイク、新作、関係なし。歌がいい、オイラ唄の……」会社社伝票処理故にビルの喫茶店で彼が得意気にオーダーしたのは、一番安いスコッチポトル、つまみはチーズクラッカーとおしんこ。「木下組って皆さんオシンコ上らないんですってねえ。今日は先生いらっしやらないから召し上れるンでしょ? ホホ……」この如何とも為し難き湿り、衆愚、歯抜けで口を抑える仕草、そして隠れてスコッチを啜る貧しさ! まるでわが社の映画のようだッ! 五〇才の新鋭

重いにもめげず衛星とかに打ちまたがって世界を駆けめぐるか勢いだし、ぼくはと言えば荒寥たる日本の映画創りに真底倦んで、肉体が嫌がる事やると精神が歪む」とか言ってニューヨーク映画祭への逃避行をして来たし、そんな秋の夜長、前記三嬢と青山で酒ば飲んだとです。なんか受ける話ばせんとこの人達すぐ帰っちゃいそうそれが悲しく、ね、ネッ、オレ、この春逮捕された話知ってる? 二泊三日と言ったら、ナニ? ナニ? と乗り出して来た。——で、結果、その一部始終をここに書かざるを得ない破目に陥ったという訳です。乞秘密保持。

事件は東京サミットが行われていた四月一日の早晩(と言うても午前一時頃)発生致しました。何故日時にこだわるかと言えば、後にぼくを取調べた刑事が「お前の話はエプリルフルだろ?」と洒落た事言うたからです。こ

映画作家にとって(ぼくの事ですが)この酒席が悪酔いの源泉であった事は明白です。

「今から帰る」と愛しの妻香代子さんに電話したのは、都営浅草線の終電発車の頃でした。地軸が遊動円木のように揺れ、中延で乗換える筈が終点東馬込迄覆りました。時は春、日は早晩、馬込でタクシーをつかまえんと必死のぼくでしたが、なにせ強烈な千鳥足。止まる車は次々と他人を乗せて発進してしまふのです。——ぼくはひどくフラストレーションしました。

ふと眺めやれば第二京浜国道は深夜の春ガスマ、街灯にほんのり浮きたって、なんと沿道にはルイイと警察官の人形達が、七、八メートルおきに並んでいるではありませんか。ふうむ、東京サミットで警視庁は、地方の街道に立って居るゴム製、木製の全ての人形を羽田周辺に運び込んで来たのか!

の話も、だから全くの出鱈目、エプリルフルだと思って聞いて下さい。

その夜、ぼくは、ぼくのボス木下恵介監督が当時撮影中の映画「新・喜びも悲しみも幾歳月」の宣伝にまつわる松竹社報誌の打合せに消耗困憊しておりました。理由は簡単。その編集長は古き良き映画時代への郷愁切なる方でわがボスの新作を、旧作のイメージで売る事こそが大ヒットへつながる道と信じて疑わない、ヌエのような松竹体質の典型的人物でした。そもそもぼくはこの映画の企画自体に反対でした。

東宝が市川昆で「ビルマの罌堇」をあてたから、松竹は木下で「二十四の瞳」を、という発想がまずあって、勝算なきを理由に木下が断わると、それなら「喜びも悲しみも」で、と作品をスライドさせただけなのです。え? 灯台守の話は今? と、ぼくは、わがボスもついにばけたかと思ったものです。

……大した移動力だなア、とつくづく感心致しました。同時にひどく腹も立ちました。先刻からぼくは、ここでタクシーを止めようと手をしきりにあげ、止まったタクシーに乗り込もうと試みているのに、後から来た人々が次々と乗り込んで発進してしまふこの種の不公正(アンフェア)は、日本では警察官が取締まるべきものではないのかッ! ——でぼくは、一番近くに安置しますオマワリさんの人形(五、六メートルしか離れておりませなんだが)にツカツカと歩み寄り、「なんかポリ公じゃ!!」と叫んで、平手で思いっきりその人形の横ッ面をはったのです。ピシャン! ととても良い音がして、瞬間掌に暖かい肉感がありました!! ——しまったッ! と思ったのと「ナニスツカア!!」とのオマワリの声が同時でした。あつという間に道路にたたきめされ、七、八メートルづつ先の、ゴ

ム人形とばかり思っていたオマワリ達
が二、三人走り寄って来て、暗がり
でドスンボタン、蹴られ殴られ、「ゴ
メンサイ！ ゴメン！ 人形と思っ
たんだよー！」との叫びも空しく、
げげば手錠かけられてパトカーの中、
ふっと意識が戻った時は、深夜の取調
べ室の中でした。弱い犬は吠えると言
うのか、殴られた腹いせもあってか、
ぼくは取調べの刑事にこうまくし立
てていたようです。「本物だと思っ
たら殴る訳ないじゃない……とに角拘留
して調べるんだったら、ぼくも弁護士を
申請しますよ。芝法律事務所は葉山水
樹って人が居るから、その人呼んで下
さいよ。一切の弁護を彼に委任しま
す。」——アメリカ映画の見過ぎなの
です。後から分った事なのですが、ま
まずいのがここ池上警察署。大田区
は公安関係に最も強く、ぼくの調書
を取ったのが、腕きき叩き上げの公安

門刑事、おまけに軽々しく名前をあげ
たわが友葉山水樹氏とは、マスコミ反
戦など盛んな折、わが盟友味岡亨のN
E T闘争の弁護を一手に引受けて、そ
の後所謂新左翼の需要ひきも切らず、
公安なら知らぬ者なき逸材なのでした。
それとホラ、われら固有のストレンジ
・ヴォキヤブライイ——つまり当局は
サミット開催中、一寸でも体制に楯つ
きそうな人物は、全て幽閉したい意気
込みだったようです。飛んで火に入る
夏の虫、とはこの事です。そうとは露
知らぬ可哀相なこの映画作家は、さ
ながらチャプリン映画の主役もどきに、
「マスコミに知れたら困るんだよ」と
か「明日迄はいいけど、あさってから
は撮影があんだからね、俺がいないと
撮影絶対止っちゃうんだからア」とか
虚勢のはりっ放し。それでも鉄格子前
の看守カウンターの高台で、パンツ一
丁の裸にされ、それもぬげと言われて

膝迄さげて、どこにも身体に外傷なき
を確認された後、今からあんなは廿六
番としか呼ばれないからね、とアイデ
ンティティも剝奪されて、同房、白髪
五分刈りの、頭だけがちょこんと見え
る小男の、隣りのせんべ布団にくるま
って、足をちぢめて眠ることとなった
のです。あー、俺もたいしたもんだ、
とうとう留置場に泊る体験を得たぞ、
これで味岡たちにも肩身が広い……だ
が、女房殿心配してるかなア、してい
ないな、キツト……と一寸悲しく、後
は白河夜舟となりました。

同房の男は前科七犯のベテレン師で、
手形バクリの専門、眼光炯々たる六〇
位のおもろい男でした。「いやア、い
い方と一緒にあったなア……そうす
か(大きく頷き) 映画監督ねえ。でも
愉快だなア、人形と思ってオマワリを
張る、漫画チックでいいじゃないの。
好きだなあそういうの……(声を低め)

でも、そのオマワリ、あんなより、も
っとびっくりしたろうね！ アッハッ
ハッ(と身をよじる)」

「軽い軽い。一寸お灸すえられて、
今日の午後には釈放ですよ。警察の事
ならなんでもあたしに聞いて下さい。
そいっちゃ悪いけど、ここに入ってる
奴等とは月とスッポンですよ。丁度あ
んなみたいなものですよ」

——仲々うまいのです。

る作家の本を全部差し入れる約束をし
て意気揚々、取調べ室にひき出された
のはお昼過ぎ。「謝っちゃいなさいよ、
素直に。それしなきゃいけませんからね」
とのマイ・バディの忠告を胸に「お早
ようございます。昨夜は御迷惑をおか
けしました」と明朗に振まうぼくに、
担当官は澄んだ眼を決してそらさず、
葉山弁護士を頼むように今朝奥さん
に電話しといたからね」とふわっとの
たもうたのです。瞬間、あれ？ とな
って、そんな弁護士頼む程の重大事件じ
ゃねえだろうによッ、と思う表情をつ
と抑えて「そうですか。女房何て？」

こき、問題は。君は人形と思ったと言
う。なぐられた警察官は、はじめから
君の挙動の一部始終を見ていたそうだ」
「はあ」「君は確かにタクシーを止め
てはいたが、車が止ると何故か後ろに
下って乗ろうとしないって言うんだよ」
「?!」「その間に人が乗る。すると又
君が手をあげて車を止める。又乗ろう
としない。そのうち向きを変えて急に
警察官に近ずいて来た。どうかしま
したか？」ってそのオマワリさんは親
切に君に尋ねたそうだ。そしたらいき
なり、なにがポリ公だッ！ って叫ん
で殴ったって言うんだよ」「何も仰言
いませんでしたよ。黙って顔、こうつ
き出してたから、てっきり人形と思っ
て——」「相手は心配してて呉れた
んだゾ」「……悪い事したなア、心配
して呉れた人ぶっちゃったりして。済
みませんでしたってホントに謝るとい
って下さいよ」「彼は怒ってるよ。取り

「いいかなア？ ひとつだけ甘えて
も。あのね、午後に釈放されたら、出
たとこにスパーありますから、そこ
で週刊ベースボール差し入れて下さい
な。長いこと入ってると、ホント活字
文化に飢えますよ。この週刊明星ね、
今日も一回読めば六度目ですけどネ……
飽きるねえ。週刊誌ってええのは、六
度も読むもんじゃありません」

——古本なら安いからと、松本清張
から司馬遼太郎迄、オッサンの知って

「がっかりしてたよ。いい薬だから反
省する迄いれといて下さいってサ——
でじっと人の眼を見ている。「昨夜
の事は話してくれたんでしょ？」「う
ん、酔って警官に暴行を働いたから泊
めてあるってね」「暴行じゃないです
よ、人形と思ったんだもの」「さ、そ

抑えようとしたら、今度はすごい眼むいて掴みかかって来たそうじゃないか」「そんな!! ぼくはすぐゴメンナサイって言いましたよ。でも地面に押し倒されて……」「自分で転んだそうだよ尻餅ついて」「そうかなア……」「不満なので痛む顎をなでた。「どっか痛むのか?」「ゆうべオマワリさんにぶたれたみたい」「(阿々大笑して)オマワリさんはぶったりせんよ。君はオマワリがぶつと思うの?」「え? ぶたれたと思うけど、ぶたれなかったのかなア……」——全然眼をそらさないのと思わず眼を落しました。偽証者は眼をそらすとか言うけど、男女だつてずっと見つめてたら照れ臭いんだゾオ。と、刑事殿はこう申しました。「今から公務執行妨害という事で取調べますからね。自分の不利になる事は答えなくとも結構です」彼は几帳面に供述調書の下にカーボンを差し込みました。

結局取調べは七時間にわたりました。彼が自筆でどんな供述調書を作文して行く。出生、本籍、経歴、家族関係。生まれが満洲は何故? 中国には何故行っていたのか? (君イ、二才から三才の時ですぞオ!) いつの間に取りよせたのか、机上にぼくの戸籍謄本から交通違反のカード迄ちゃんと積んである。はじめ戸籍や学歴は、本人が嘘をつくかどうかの参考資料にするんだろ。う位に思っていました。だから退屈せぬように、心証良きようにと冗舌とさえ思える程自由に話しました。どうせ夕方釈放なら、この刑事さんを退屈させても可哀相やし、お互い時間は楽しく過しましようやとの思いで。だが途中からなんだか変だなど思い出ししました。彼はほとんど彼流に作文を書くのです。曰く「私はこれ迄一度もオマワリさんに敵意を抱いた事もなければ、反感を持った事ありません。警ら中

の巡査をみても、御苦勞サンと思うことが多かったと思うのです。ですから制服を着て、非常警戒中の警察官をなぐるなど、私としてはとんでもない事です」——そうだね? 書いてから念を押すのです。ウイ、オア、アグリ……だってそうじゃありませんなどと云える立場にないのですもの。「公務執行妨害ってどういう罪か知ってるね」「知りません」「知らない?」「公務を執行中の人をなぐったりすることでしょ? 駅員なんかをなぐっても公務執行妨害ですか?……ですな」——われながら間の抜けた応答だと思いましたが。でもイノセントな表情のまま、アット・ユア・サーブスです。でもほんとにその時、ぼくは公妨の量刑を知らなかったのです。今公妨には罰金刑はなく、懲役三年迄の実刑あるのみです。勿論確定すれば前科です。米国への観光ビザはおろか、パスポートも発

行されません。水牛周辺の国際化の波にも立遅れてしまうのです。——「君はいい友達を沢山持ってるみたいだねえ」さり気なくそう言った刑事のひと言に一瞬ぼくは背筋が寒くなりました。彼は明らかに何かを意図している。ふっとそう思った時、彼の机上の結構厚手の書類が気になりました。そう言えば先刻、わが息子のことを述べていた時、チラとその書類をくって、「子は親に似るっていうけど、君んともそっうだなア」と皮肉な目をしたのを思い出しました。マイ・サンは中学の折、ボーリング場の靴をはいたまま逃げたりして、この警察署で補導されたことがあるのでした。と共に、あ奴こ奴——何度か家迄彼等とのかかわりを聞きに来た公安の顔や、あ奴こ奴の為差し入れに行っていたいんな警察署で、無理矢理住所氏名を奪われた事やが走馬灯の如く戻って来ました。つまり驚異的

な日本警察は、いつの頃からかどこかでオーバードラップしてくる人物達の資料を着実に取り揃えていると思えたのです。現に共同通信のわが兄は、翌朝から弟の釈放の為眼のさめるような暗躍をしました。その時警察は、警察権力への彼独特の反感を調査するのだと言ったそうです。いつ迄も泊め置くよう。指差した妻は、翌朝六時から車で署をばっており、護送車につながられる夫を見て、大事な夫を帰して下さい。と撫子の如く哀訴懇願したようです。何人かの友人の工作に対しても。その左翼的傾向が問題。との返事が返って来たそうです。そうとは知らぬわがイワンの馬鹿は、警官を人形と思ったか否かの一点を立証しようとして、刑事殿の供述調書の記載に悪戦苦闘していたのです。一言で言えば、担当官はぼくの供述書を全く体制的供述で埋めつくして、ぼくの資料と対置矛盾す

るよう心血をそいだ名文を書いたのです。結果は何か? 彼の過去のデータと照応する限り、この供述は出鱈目である。よって本物の警官を人形と申したとの彼の申立は全くの虚偽である。彼は敵意に満ちて真正の警察官を殴打したのだ。いかなる方便で検察庁内で釈放をかち得たかは飲んだ時にでもお話ししよう。検事は、映画じゃないんだゾ! と叫びましたし、ぼくの捕縄を握っていた警察官はぶつと吹き出しました。公妨は外れて五万の罰金刑になりました。晴れて自由となり差し入れの本を大量に買い入れて池上警察署に戻りました。「困るよ困るよ。同僚の差し入れは受けられないだけだなア」看守は困った顔を向けました。担当刑事が出て来て。判決文はコピーするからね。ファイルしといてやるよ。と人の肩をドンと叩きました。

ワイプロ筆談・第2弾 高橋悠治 八巻美恵

高橋 またワイプロ筆談、今度は家庭版です。11月17日から4泊5日でフィリピンに行きました。といっても、マニラのはずれ、ケソン市のフィリピン大学周辺をほとんどはなれなかつたわけだけど、作曲家で音楽学者のホセ・マセダの論文集を来年日本で出版する話が決まったので、一応著者と打ち合わせ、ということ、でも本当のところは、もう5年も日本をはなれていないので、どこかちがうところへ行きたい、ある晩マセダに電話をかけて、来月行きたいがマニラにいるか、とたずねてみたところからはじまった旅行でした。同行者はフィリピンははじめてだそう、まずは感想をきいてみることにしましょう。どうぞ。

八巻 マニラ空港は、いつだったか大阪からタイに行ったときトランジットで休憩したことがあった。その飛行機に乗りあわせたフィリピンの人たちは

飛行機の車輪がマニラ空港の滑走路にふれた衝撃を感じたとたん、やんやの拍手、ほかのお客もつられて笑ってしまふのだった。今回もそっくりおんなじで、またわたしはつられて笑ってしまった。空港のビルを出ると、体中にまとわりつく暑い空気、車の排気ガス、ひっきりなしのクラクションの音、タガログ語のひびきなんかが一気におそいかかってきて、ああ、よそのくにだとおもう。マニラ空港のビルはバンコクの空港ビルとくらべると立派だけれど、そこを一步出れば似た風景がひろがっていたから、たぶんフィリピンの方が落差が大きいとこなんだろう、と推しはかる。フィリピンも島国だけではないかひろびろとした印象。大通りに面したおおきなビルのいくつかは、ガラスが割られたりしたままだれもいないみたいだった。二月の政変と関係あるのかなあ、とまた推しはかってみる。

高橋 空港にむかえにきてくれた人となかなか会えなかつたりで、大学のすぐそばのホテルに着くまでには3時間もかかってしまった。そのホテルは大学の施設なんだけど、へやのそれぞれに有名ホテルの名前がついていて、インテリアを似せてあるらしい。へやごとに内部がちがうんだ。カフェテリアは「マニラで一番おいしいコーヒー」をホットプレートであたためている。これがインスタントでね、豆を挽いたコーヒーはその後もどこでも見なかった。

「たいへんな日にきたね」と、みんなに言われた。クーデターのうわさもあつたし、人民党のオラリア議長暗殺、日本のビジネスマンの誘拐事件が起こつたばかりで、その日はオラリア暗殺に抗議するゼネストが予定されていた。もう一つみんなが知っていたのが、その前の週に日本に行つたばか

りのアキノ大統領がどのようにむかえられたか、ということね。いままで政治の話を、すくなくとも人前では、したことがなかった人たちが、こういうことを議論しているのを見て、時代が変わつたと思つた。同時に、日本にずっとくらししているおかげで、ぞつとずるくらいシニカルになっている自分に気づく。人の希望も手はなしでよろこべない、という風になつてきているのね。オラリアの遺体は大学の礼拝堂、これが円形で壁のない建物なんだけど、そこにずっと安置してあつて、いつも人があつまつている。

八巻 着いた日の夜その礼拝堂の前を通つたら、まわりには屋台がいっぱい出て、ほんとにあふれるほどの人だった。帰る前の日が葬儀。フィリピン大学の構内に住んでるマセダ先生から朝電話で、すごい人だから見に来てごらんと言われて、ジプニーを乗りついで

行ってみた。わたしたちが着いたときは、ミサも終わり、オラリアとかれの運転手のふたつのひつぎを先頭にマニラ市内を縦断するデモに出発するところ。見渡すかぎり、たくさんの人で、先頭が出発したあと、どこからか歩いて礼拝堂に到着する小グループはあをたたく、いったいどれだけの人がいたのだろう。全体を知るには夜のテレビニュースを見るにかぎる。夜は不穏だから八時にはホテルに帰るようにと心配症のマセダ先生が言うし、言うだけでなく毎夜九時にはチェックの電話がかかってくるので、夜はおとなしく、もっぱらテレビを見てください。その夜はとにかくオラリアの葬儀デモを見るのを楽しみにしていたが、ニュースの時間にはまだ間がある。チャンネルをガチャガチャとまわしていると、ソニア・ブラガが出ています。あれ？とおもって（ソニア・ブラガとは蜘蛛

女のキスという映画に出たブラジルの女優）見ていると、これはコズビー・ショウというホームドラマで、かのじよは、いわば「今夜のゲスト」として出ているらしい。コズビー氏は産婦人科の医者。その息子のコワイ教師がゲストの役で、妊娠したためコズビー家をおとすれたいで、息子に勉強に対する意欲もわかせてしまうという単純な、しかしうらやましいおはなしで、つい終わりまで見てしまっ、肝腎のニュースを見逃したのだった。家に帰ってから水牛の前の号を読むと、デイヴィッド・グッドマンがこのコズビー・ショウのことを書いていてではないか。わたしがこの番組をフィリピンで見たなんて、さすがのかれも想像しなかっただろう。テレビはほかにもおもしろいのがあったよ。

高橋 身の上相談番組。和解した中年夫婦が愛の二重唱をミュージカル調に

に意味のある事件だった、という以外に、そんなにひどい死にかたでも、ふつうの人がふつうに死ぬのとおなじだけの意味をもって死んでおなじか、と逆にかんがえた。われわれの社会では、こんなことはないだろう。死は事件ではありうるが、意味はなくて、利用価値があるだけだ。生きることもおなじだ。

八巻 ことばがふたつあるのは、うらやましいという気持ちも含めて、いいなあとおもったね。でも、町のなかできこえてくる、つまり機能しているのはやはりタガログ語なのだった。ニュース番組を見ていると、事件の説明は英語だけど、それにはたいするちよっとしたコメントなんかはだいたいタガログ語だった。ということは、わたしたちには一番おもしろいところとがわからなかったわけです。

はじめにマニラはひろびろとした印

象だといったけれど、この印象がますます強くなったのは、スーパーマーケットというチェーンのスーパーマーケットに行ってみて。大学のそばに新しくできたやつで、とにかくだっぴろい。なんでもあるよ、とマセダ先生が言うとおろ、やたらにひろい売場に、ほんと、なんでも売ってはいいるが、買いたいものはなにもない。二階の両端には映画館が四館つづ、計八館もある（もちろんスーパーマーケットの同じ屋根の下に）。あ、このスーパーで時限爆弾が爆発したのも、われわれがいたときのこと。まったく「わざわざこの週を選んで来たのか？」と言われてもしかたない。ところどころいろいろめんどろをみてくださったマセダ先生とはいつからの知り合いなんですか？ かれの愛車、緑色のヒルマンはすごかったな。マニラで一番ふるい車だ、といばっていただけのことはある。乗ってボタンと力ま

うたっているそばで、その娘が手話で「愛してる」などとやっている。その後でカウンセラーのおばさんが二人、「かのじよは夫を責めなかった。かれのいいところだけを見ていた。神さまのおみちびきで、あくまにかつて、家庭は救われたのです」と、唾をそばして論じている。迫力あった。だいたい英語番組を見たわけだけど、そこでもタガログ語の部分はあるし、タガログ語のコメディの間に英語のフレーズがでてくるし、ことばについてはまったくちがう感覚をもっているのだろうね。フィリピンのなかにはタガログ語では通じない地方だっておおいいんだから、くにといい感覚だっちがうはずだ。マニラの下町キアポの教会では黒いキリスト像の前で祈っている人たちがいる。人が死ぬことについても、ちがう風を感じているだろう。オラリアは拷問されて殺された。それが政治的

かせにドアをしめると、その振動で鉄の粉が上のほうからふってくる。雨がふると足元に水がたまる。ワイパーがないので、タオルでフロントガラスをふきふき走る。暑いから窓をあけようとしても、マセダ先生以外のことををきかない、という調子。なんだかその頑固さが持主と似ているみたいでさ。高橋 マセダと知りあったのは一九六六年だった。ユネスコの東西音楽会議の時。長い指揮棒で現代音楽アンサンブルを指揮していた。おどろいたのは、その時のかれの作品「アングガン」で、60個もゴングを使った曲なんだけど、風がさらさら吹きすぎるような音がしていた。フランスやアメリカに留学していたし、ピアノリストだった時期もあるらしいけど、いまはぜったい西洋楽器を使わない。竹筒とゴングばかりで、それも何百人もの演奏者が必要だったりして、それぞれの楽器がかってな

とを、しかもむつかしいリズムでやっている。それを学生がかなりいいかげんに演奏しているんだけど、それでいて全体はふしぎにデリケートなんだね。中国やインドともちがうし、もちろん日本的な感覚とはまったくちがって、たぶんあれが東南アジアの感性なんだろう。こんな音はコンピュータではできないだろう、とすぐ言うわけ。たしかに何百人がすきかかってにやってくる音は、どんな機械よりも複雑な味がある。マセダにしては例外的に少ない人数、といっても30人のための曲の譜面は、やっと製図机にのるくらいの大きさだったので、それをだしてきて、くわしく説明してくれた。「スリンスリン」という曲で、10本の笛は全部調子はずれていく。それがおなじことをずれながらやっていく。それだけでへんな気分になってくる。

今度の目的のひとつは、鼻笛のレッ

る高級ホテルのならば通りにも、くずれかけたビルや草のしげった空き地があつて、洗濯物が干してあるから見ると、空き地に住んでいる一家がいる。小さな子どもが手をだして、どこまでもついでくる。交差点ごとに、新聞や花やキャンディーを車に売りつけようとすることもおとながい。圧倒的に貧しい。あらゆる入口に銃をもったガードがいる。人口の何割が警官や兵士なのか。これだけの人間を国がやしなうのと、あらゆる品物をただにするのと、どっちが経済的なのかわからない。マセダは、人間が安いのはいいことだ、という意見で、これもよくわからない。安ければ大勢が働くから、創造的になる、機械が人間より安くて、人間をいらなくしてしまう文明には反対だ、というわけ。安い人間の方がしっかり生きていように見えるのは、おもしろいことだ、とおもったね。

スンだった。週一回、音楽学校にカリンガ族の講師がくる。これがすごいハンサムな人で、目と髪がきれいだとおもったな。生徒はアメリカ人の音楽学者と、北京からきた中国人の音楽学者だけで、アメリカ人の方は自分でつくった笛をもってきた。それはよくできているけど、模様がない。その模様の意味があつて、だいじらしい。でも、笛はむつかしかった。管を頬にあてて音のでる位置をさがすんだけど、高い頬骨をもたない人はどうするんだろう。この人たちは今頃は台湾に行っているはずだ。音楽会議でアイヌと高山族とカリンガ族が出会った。

八巻 カリンガの音楽の生徒はそのふたりだけではなくて、もっとたくさんいた。名簿があつたもの。だからかれが二時から五時までいるあいだに、生徒は好きなときにレッスンを受けにくい、というシステムなのだとおもう。

八巻 マニラの町は高級ホテルも高層ビルもたくさんあつて都会の顔をしているけれど、それらがなんだか色あせて見えたのは、しっかり生きている人たちとそぐわないからということもあるだろうけど、実際にきたないのね。具合わるくなりそうなのもすこい排気ガスを四六時中あびているから、もとはピッカピカのまっしろいビルもみんなほごりの色になってしまつて、みじめなこと。古い石の建物や教会、それとしっかり生きている人たちの住んでいるうちは、排気ガスにびくともしない。

高橋 交差点で少年たちが売っているキャンディー四百二十個入りの大袋をスーパーで買ったのが、一番の記念になりました。ほんのすこしものを見ただけで、いそがしく歩きまわったりしなかった。もともと観光にもそれほど興味はなかったし、ちがう風景があ

かれはほんとに美形だった。褐色の膚も印象的だった。カリンガの男たちはそれぞれ自分でつくった鼻笛をもっていて、夜になるとそれを吹いてすきな女のひとを呼ぶのだそうだ。世界にひとつしかない笛の音をきけば、あのひとが呼んでいる、と女のひとにはわかるのだ。鼻で吹くと息の量が口の半分になるから、音量もちいさなものになる。でも静かなカリンガの村ではよく通って聞こえるということだった。

そうした山岳地帯に暮らす少数民族でマニラのスラムの住人になってしまったひとたちも、またたくさんいるらしい。交差点で止まる車に寄ってきてお金をくれと手を差し出す、見るからに疲れきった女のひとに、マセダ先生はコインを手渡したことがあつた。顔をみれば山から来たひとだとわかるのだ、と言つて。

高橋 有名なマニラ湾の夕日を見られ

るだけで充分だった。時間がちがう流れたかたをしている。世界中のものは、東京でも見られるし、それなりにわかるような気がしているけれど、この時間感覚はない。その流れにはいつてみると、わからないものがすぐそばをうごいていくのが感じられる。そんな場所、また行きたいよ。

八巻 会いたいひとをたずねてとおくまでも行くというのが、わたしは好き。もともと「たずねる」のは人に限らないね。帰りの飛行機にも行くときと同じほどのフィリピン人（それも多きは若い女の人次だ）が乗っていたけど、日本の地に無事着陸しても、だれも拍手はしなかった。

心残りも、公開されているというマラカニアン宮殿に行く時間がなかったこと。イメルダの残していった三千足の靴を見るといい、といわれたのに。

私のベスト10

一九八六年

下半期 津野海太郎

下半期では、9月の第3週というのが特別のときだったみたいだな。ベスト10のうち3つまでが、この週に集中してる。

①伊豆の長八美術館を中心とする松崎町めぐり——9月15日〜16日。

②高橋悠治ソロ・コンサート「夜の時間」——9月19日。草月ホール。

③時々自動「ローテク・コンヴェンションPtメタル」——9月20日。中野テルプシコール。

このうち①については、もう「水牛通信」で報告を書いてしまったから省略するとして、まず②ね。

聴いていて、ある瞬間に肩や背中が凝りが「スボン！」と抜けるのがわかる。そういうコンサートというのが、おれにとってのいいコンサートなのね。ほんとに「スボン！」と小さな音がするんだぜ。悠治のコンサートで、ひさしぶりに、その音を聴いた。

やっぱり水牛楽団のつづきという感じがしたんだけど、どう？ 以前のアジアの民族楽器も気持よかった。でも、「スボン！」は聴けなかった。エキゾチシズムという大袈裟だけど、別の土地、別の伝統にたいするこっちの好奇心が邪魔をするのね。シンセサイザーの場合は、それがいい。そのせいかどうか、意外なことに、カウベルや竹笛なんかより、もっと徹底的に小さいんだよ。悠治がはじめに、

「ええっとさ、自分の家で音楽をつくるのを、そばでみんなが見てるというふうにしたいのね」

というふうなことをしゃべってたけど、シンセサイザーだと、それができる。ピアノだと、聴く側は演奏者に気押されちゃう。「カフカ」——あのぼそぼそした語りも、なかなかよかったんじゃないの。うん。

その晩は打ち上げで飲んで、翌日は

二日酔い。ところが、その日の午後2時が③の開演時間なわけよ。しんどいな、でも、古い友人がやってることだしなど、荻窪から中野まで、のそのそと中央線でかけていった。

ところが、これがなかなかのものだったのね。時々自動というのは、朝比奈尚行という男が中心になってやっている劇団なの。で、その朝比奈というのは、おれより10歳ぐらい若いのかな、昔から、ふだん街に居ると同じように自然に舞台に居ることができるといふ、ふしぎな力をもったやつなの。悠治が自分の部屋に居るみたいにして舞台に居るしかたも好きだけど、そうね、あそこから「てれ」をなくしてみたみたいな感じかな。

へんに間のぬけたエピソードをかきねて、世界とか都市の終りみたいなイメージをつくっていく。

その点では如月小春さんたちZOO

④の「DVAIRY」とも似てるんだけど、如月さんとこみたいに、俳優たちの集団的なアクションでエピソードをつないでいくんじゃなく、それを俳優たちのプラスバンドがやるわけ。朝比奈のセンスなんだろうけど、若い俳優たちが、みんな、けっこう自由な感じで舞台にいたからね。演じるというより、そこに居る。かれらが「舞台に居るしかた」を見るのがたのしい、というような芝居なの。

おれは、いまいちばん好きな集団だね。いまのところはね。

しかし、こう挙げてみると、どれも小品だな。小さい作品とかエピソードをあつめて、ひと晩のだしものにするというやり方。そういえば石山修武だって、伊豆の長八美術館こそ大作だったけど、それと同時に、今年、建築会社を排除して、猫の顔みたいな土地に自力でつくる小住宅「笑う建築」モ

デルを発表したわけだしね。

その他その他、おれの知人たちは、いまいっせいに小品にむかって走りだしたみたいだ。滝口修造さんを思い出した。あの人、晩年は手紙とか友人の個展パンフレットとかいった私的な場所でしたか、作品や文章を発表しなくなっちゃったんだよね。たまにだしたエッセイ集に「点」なんて題をつけちゃったりさ。みんな、あこのころの滝口さんに似てきたというか。まったく関係ないのかもしれないけど。

ついでに、ここで究極の小品を一つ挙げておきます。

④林のり子「乾燥エノキダケ」——11月9日。林家で試食。

この日の夕刻、田園調布の林家（パテ屋）を訪ねると、のり子さんが「これなんだと思いますか？」というのね。「はあ？」とテーブルの上を見ると、大皿に、なんか磯の珍味みたいな、長

さ5、6センチ、細い毛糸みたいな物体がショーユ色して盛られてた。おれ、すぐわかったからね。高級料理には弱いけど、中級以下の食品については自信があるんだよ。

「エノキダケでしょう」

当たり前だった。乾燥機で乾燥させて、数日、天日で干しただけのエノキダケもあったけど、「ふーん、エノキダケって、こんなに甘いのか」というくらい、ふんわりした、いい甘味がでてるのね。びっくりした。

林さん、東北のどっかの町から、エノキダケをつかった保存食を工夫してくれと委嘱されて、それで、こんなのをつくってみたんだってさ。マツタケ、シイタケ、シメジ、ナメコ等々じゃなく、なんたってエノキダケだからね。たよりないというか、しまらないというか、思いがけない品のいい甘さをすくめて、その意外性がおかしかった。

な、究極の小品だろ？

⑤フランチェスコ・ロージの「カルメン」——11月22日。佐藤信家のビデオで。

西荻窪に越してきた佐藤の新居をはじめて訪ねた。かれも小品派に移行しつつあるみたいだな。

「もうやりたいことはみんなやっちゃったよ。あとやりたいのは、ふつうの家みたいなスペースを確保して、5日ぐらいで小さい芝居をつくって、いそいで観客を電話であつめるのね。30人か40人ぐらいだったら大丈夫でしょう。そういうのがやりたい」

そんな話をしながら、「あっ、海ちゃん、これすごいんだよ」と見せてくれたのが⑥の大作オペラ映画なんだからさ、なんかムチャクチャなんだ。

ロージだからね、どこもかしこも、くっきり焦点のあった細部がいっぱい詰まったドキュメンタリー・タッチの

「カルメン」なので、これは舞台じゃなくて映画なんだぞとばかりに、俯瞰と縦に深い構図でグイグイ押しまくるんだよね。きわどい大股開きでホセを誘うカルメンとかさ。あまり一所懸命に見すぎて、ぐったり疲れた。いまやオペラは映画のものなんだね。そのことがよくわかった。

⑥アモス・オズ「イスラエルに生きる人々」——晶文社刊。10月19日読了。

⑦橋本治「恋愛論」——講談社文庫。11月23日読了。

この秋はユダヤ主義にかんする本をいろいろ読んだ。デイヴィッド・グッドマンが帰国する前に、おれの以前の演劇論を、ゲルショム・ショレムやマルティン・ブーバーとくらべて論じる面白い文章を書いてったのね。それに刺激されて読みはじめて、そのつながりで、晶文社でだしたまま読みそこんていた⑧を読んだの。

オズはイスラエルの小説家。「ピース・ナウ」という労働党左派系の運動の活動家でもある。でも、もう労働党はやめちゃってるらしいけど。

一九八二年九月、ベイルートの難民キャンプで一五〇〇人のパレスチナ難民が殺された。オズは苦しむ。そしてイスラエルに生きるさまざまな人々の場所をまわって歩く旅にでるのね。すごいのは、かれと同じ考えの人たちじゃなく、おもに、現ベキン政権支持の右派の連中を訪ね歩いていること。しかも、かれらは主として貧乏なスペイン・東洋系ユダヤ人で、オズたちドイツ・東欧系のユダヤ人には、いわば階級的な憎悪をいだいてる。

だから、かれらの意見をきき、かれらと論争するオズの立場は、なかなか単純でないわけさ。いま世界中でいちばん複雑な場所におかれたインテリといてもいいと思う。

そして、オズはといえば、いっさいの迂回作戦を排して、その複雑奇怪な場所、信じられないような正面突破をこころみるんだからね。すさまじい倫理的腕力だよ。要約不能。おれの方法ではない。それはわかっている。でも、たいしたもんだ。もろもろのノンフィクションは吹っ飛ばさう。

肩に力がはいった。でも、その点にかんしては⑦もかなりのものなんだぜ。はじめて橋本治の本を読んで、あっけにとられ、かつ感嘆した。

この「恋愛論」という長い講演で、かれは自分の高校時代の初恋を語ってるんだけど、その相手っていうのが男なのね。だから「仮面の告白」の一九八〇年代版——でも、三島よりはるかに複雑でおとなっぽい。男は女みたいにして、自分の個人生活のうらおもてについて、こまごま綿々としやべる能力をもっていない。と信じていたんだけど、

橋本治はそれを楽々とやっちゃうんだよね。他人の気持ちの裏の裏の、また裏を読むとかさ、そういう女性の領域に平然と住みこんじゃう。しかも理屈っぽい。ちっとやそっとでは情緒にながされない。

男のシングル・ライフ論としては、同じころにでた海老坂武のものより、はるかに面白かった。私など及びもつかない。この本には死せる有吉和子擁護論が併録されてるが、近年の「怒りの文章」として傑出してはいる。

建築、音楽、演劇、映画、食べもの、本ときて、つぎは集会。パーティとくれば、やっぱりこれにとどめをさすわけですよ。

⑧津野海太郎「歩く書物」出版記念会——7月18日。神田バラライカ。

6月の藤本和子「ブルースだってただの唄」出版記念パーティが大いにもりあがって、そのおまけみたいに、し

たしい女性の方々があつまってくださった。たのしかった。ありがとうございました、でした。

ただ、どういう面子になるのか、幹事の方々が、まったくおしえてくれなかったんだよね。

で、はじまるまえこそ、ちょっと緊張したけど、はじまっちゃえば、まわりにいるのが女性だけだなんてこと、ぜんぜん意識しなかった。いつもの水牛関係の飲み会とまったくおなじ。あたりまえか。ま、そういうこと。新宿チリンポアの二次会まで、いつはてるでもないおしゃべりの渦にまかれて、ちょっとだけ橋本治の境涯に近づけた気がしないでもない。

⑨本橋成一「魚河岸の人々」だったかな？ 6月5日所見。新宿オリンパスギヤラリー。

⑩TBS「熱風街道1万キロ・戸井十月バイクで走るシルクロード」――

10月10日。自宅で。

次は写真とTV。おれの記録は8月から精密になるのね。⑨のデータがやぶやなはそのせい。てっきり7月だったと思っていたので、上半期のものが一つまぎれこんじゃった。

ある意味では筑豊もそうだったけど、サーカスでも上野駅でも、本橋さんは、おおぜいのふつうの人たちが集まり散じる場所を、長い時間をかけて撮る人なんだね。こんどの築地の魚河岸もそう。で、そういうものって、写真集で見ると、大画面で、どんな細部もきちんと見える、そういうものの集積がもつ迫力にはとてもかなわない。

大きな道路をおびただしい数の男たちが、リヤカーで、トラックで、自転車、こっちに向かって押しよせてくる。それをやや上方から撮った写真が

あった。「アラヨッ！ どいた、どいた！」という一心太助のかけ声が聞こえてくるみたくだった。

見近かな人の旅のなかには、おれの旅もすこしだけまじってるんだよ。だから、おれは旅をしなくなっちゃって旅をすることができない。⑩のように、わざわざテレビで放映してもらったりすれば、なおさらだ。

50日、一万キロのシルクロードを走るうちに、疲れはてた戸井の顔が、いつのまにか、まぎれもないモンゴリアンの顔になっている。仕掛けこそハデハデしいが、それを地味に地味につくっていた。人々が馬で走るべき土地をバイクで走る。なぜ？ 走りたいから。「身勝手と知りながら、はた迷惑を承知の上で」――その気持がつよくあって、ああいう地味なつくりになったのだろう。オシマイ。最後は駆け足になってしまったね。

キリコのヨリクツ 玖保キリコ

私にとって、「笑い」が純粹に「笑い」としてだけで存在していたのは、はるかかなたの昔のことである。何故なら、それは私が漫画家だからである。

「笑い」は常に私にまとわりついてくるのだが、同時に、非常に遠くにあ



る。一瞬、「ん？」と思われるかもしれない。普通、漫画家というと（しかも私は、ギャグ漫画家だ）「笑い」と手をつないでスキップしているような印象があるかもしれない。

しかし、漫画家というのはやはり職業だから、「笑い」と遊んでいてはいけないのだ。

「笑い」に対して、なるべく客観的な態度で臨まなければならない、という意識が常についてまわるのである。

つまり、今、私が「何か」に対して心から「おかしい」と思って笑っていたとしても、必ず、この余計な意識が頭のすみっこに貼りついていてということになる。

余計な、というのは、やはり、私は笑っているという行為においては、人は主観的立場にある方が、客観的立場にあるよりも、ずっといい――それが良いとか悪いとか、正しいとか正しくないとかではなく、ずっと気分的に楽しい――と、思っているからである。

もちろん、「笑う」という行為のスタートの時点においては、単に「おかしい」と思う気持ちのみが存在している。

スタートの時点から余計なものがあつたのなら、それは本当の笑いではなく、「笑うフリ」にすぎない。

しかし、スタート時点では純粋なものであった「おかしい」という気持ちがいったん「笑い」を誘発すると、笑い終わったとき、もしくは、笑っている最中に、はたまたひどい時は、笑い出した次の瞬間には、この意識が自動的に働き出し、その笑いの構造を分析しようとするのである。

途中で分析が始まってしまったことに気づくと、行動は「笑って」いても気持ちは「笑っていない」わけであるから、非常にシラける。

そらぞらしさはぬぐいきれないし、なんととっても「笑い」に対する自分が不純であると思われる。

それでは、私の意識が何のためにそんな分析をしようとするのかというところはある一つの判断を下そうとする

からである。

使えるか。

使えないか。

もちろん、思った瞬間にそれを自分の漫画に使おうというのではない。

使おう、という意識はないのだが、使える質の「笑い」であるかは考えてしまふ。

「笑い」といっても大きっぱに3つに分けられると思う。

①聞いても読んでも笑えるもの。

②聞くと笑えるが、読むと笑えないもの。

③聞くよりも読んだ方が笑えるもの。

私の言う、「使える質の『笑い』」とは①と③を指す。

聞いておかしい話が、そのまま、読む

とおかしい話になるとは限らないのだ。つまり、おかしい話がすべて漫画になるとは限らないのだ。

口で説明したときは非常にもしろくても、いざ漫画にしてみると、あまりおもしろくならなかった、なんていう「おかしな話」はたくさんある。

だから私は、それらを判断しなければならぬのだ。

こういった判断が、ほとんど無意識下において習性化されてしまったのも、ただただ私が「笑い」を職業にしてしまったためであると思う。

私にとって、気軽に笑うということ、は、難しい。

何も考えずにのどかに笑っている人を横目で眺めては、笑えば何かを必ず考えてしまうわが身がセコク思われ、情なくなる。

これでは、ほとんど職業病である。

ときどき、自分の商売がつらくなるときがある。

楽しい気分になるときに「笑い」について描くことは、全く問題ない。

しかし、そうでない状態、たとえばめちやくちや悲しいとき、ほんとうなら、布団を頭からかぶって寝てしまいたいような悲しい気分になるときに、それでもやはり、お仕事をしなければ、と机に向っていると、何か、こう、奇妙な感覚に襲われるのである。

私がかわいがっていた犬のポチが死んでしまったとする。(玖保は生まれてから今まで犬も猫も飼ったことはないけれど)

失恋でもいい。

とにかく、そういう悲しい気分の自分が現実にいる、とする。

しかし、そういうときでも「仕事」はしなければならない。

どうするか。

悲しい気持ちでおかしなことは考えられない。

だから気持ちを切り離すのである。仕事のときは「仕事」に没頭する。

そして、ふと手を休めたときに、

「ポチが死んでしまった！」

と「悲しみ」の方に没頭し、ある程度めめめを泣いて一息つけて、再び仕事に戻るのである。

この「悲しい」と「おかしい」という気持ちを混ぜてしまっただけいけない。シラけてしまって、どちらも未消化のまま、胸の奥でくすぶることになるからである。

「悲しい」ものは純粋に悲しく、「おかしい」ものは純粋におかしく、発散させなければならぬ。

はたから見ると、「けけけ」と「めめめめ」を交互に繰り返しながら作業を続ける私の姿というのは、異様に映るかもしれないが、結局、これが

私にとって一番いい方法なのだと思う。

もちろん、悲しいときに、「ツネコがどうした、キリコがどうした」といったたわいもない話で読者の笑いを取ろうと四苦八苦していると、どうして自分がこんなに悲しい気分になるところんなことをしなければならぬのだからかと考えてしまい、より悲しくなってしまう。

しかし、「悲しい」と「おかしい」を同時にかかえて、意識的に、それらが交互に出てくるようにコントロールしようとする自分というのは、「悲しい」を通り越して、「おかしい」ものに思えてくるのである。

そうなると、もう卑屈に「へへへ……」と笑ってしまうかもしれない。

このうすらバカ笑いをバカにしてはいけない。

この中には、大いなる悲しみが内包されているのである。

山がない(3) 巻上公一

数日後、県土木課の石川さんという人がわが家に来た。現場を視察して、行政指導をしたそうだ。内容は、わが家の横の側溝を深く広くするとの事であるらしい。

あいにくぼくは仕事で東京にいたため、詳しい事を聞けなかったので残念だった。行政指導とやらを目撃してみたかったし、エーッ、たったそれだけ

エーッ！と、目を丸くしてみせたかった。山をいきなりなくして、沢を埋めつくしてしまった責任は、たったそれだけの事で埋まるのだろうか。若い大成建設の現場監督が図面を持ってやって来た。

「このようになりますので、よろしく願います」

だいたい、最初からキチンとすればいいものを、今頃になって、よろしくもクソもないと思う。常識とか良識とかいう言葉はそれ程好きな言葉ではないが、少なくともぼくの方が、ちょっとはマシな常識を持っているのだと感じてしまった。

それで、今度は側溝部分の測量などが始まった。

で、思う束の間。側溝部分の土地の持ち主が、ここに水はいっさい流させないと言い始めた。

「という訳で、しばらく側溝の工事は

できません」

と、再び若い現場監督が訪れた。当たり前である。なにしろ、はじまりの順序が逆転しているのだ。子供が砂山を作るのとは訳が違う。

しかし、それは意外に簡単に、一週間後、お金でケリがついてしまった。側溝部分の土地を県が買ったのである。まあ、これは土地の持ち主故の、ひとつのかけひきであったのかもしれないのだが……。

そして、この頃の真夜中、なにやら巨大なトラックがひんばんに行き来する。地響きのような、大地震の前ぶれのような、気持ちの悪い振動である。ある日など、水道管を破裂させ、断水にもなった。

ヒカシューのメンバーたちが、リハールのためわが家に来た。ぼくが急になくなった山の事で憤慨しているのを知っているの、「なくなった山ッ

てどこなの？」と、皆興味津々。

「テニスコートが出来たら、タダでプレイできるとかの特権をくれればいいのね」

「無理だと思うよ。なにしろ、会員になるのに200万とか、300万とか言ってるし」

「高いね」
「高すぎるよ」

「それに、テニスコートだけだったらいいけどね。看板を見ると宅地分譲と書いてあったし」

「宅地になるの？」
「よくわからないけど……ほら、よく別荘地で売って、いざ買ってみると、山林分譲で家を建てられない土地とかあるし」

「でたらめだね」
「でたらめすぎるよ」

と、ぼくの中の疑惑は、すっかり巨大化してしまっただよう。むこうがで

たらめなら、こっちだってどんどんいたずらにでたらめな想像をしてやるゾって感じた。

「ねえ、これ危ないね」

メンバーのひとり、井上くんが、側溝のフタがあげっぱなしになっているのを発見した。それは、もう4日も前からあげっぱなしで、深さは2mほどある。

「子供が落ちたらケガするよ」

さすが、井上くんは幼稚園の先生である。ぼくも気がついてしたが、ひとりではとても重くて動かせなかった。井上くんと一緒にフタをする事にした。

それにしても、とぼくは思う。果して側溝を深くするだけで、問題は解決したのだろうか。浸水を防ぐ役割は確かに果たすだろうか。最初に心配した大量の土砂の流出や法律上の問題は、まったく消えてしまったとは言えないはずだ。

しかし、ぼくの心の中には、意外な落ちつきと安心感が芽ばえはじめている。

実をいうと、件の側溝でさえ、工事を始めて、もう三ヶ月になるうとしているのに、いっこうに完成していない。にもかかわらず、恐ろしいかな安心感があるのだ。

例えば、その昔、ロッキード事件の疑惑議員たちが、平気で事件後も政治を続けていたのにもかかわらず、だんだんとその事が過去の小さな点のように消失してしまった気がしたものだ。

生活にタテとヨコがあるとして、タテが個人と時間の生活、ヨコが共有と空間の生活と考えれば、ぼくは急速にタテの生活の急がしさの中で、ヨコのありようを忘れてしまっただようになっている。

そんな平凡な午後。なにとはともあれ三原山が大噴火した。

料理がすべて 田川律

〈味が無い〉

とうとう病院へ入った。十月の中旬に血尿が出たので、国立東京第二病院へ行ったら、前立腺がはれているから手術しなくてせ、といわれ、一カ月後の十一月末に入院した。ちょっとした食はずで「めだか診療所」で寝込んだことを除けば、なんと二十年振りの入院だ。

もっとも、ちょうど十年前に、友だ

〈二万円の会席〉

田園調布のお惣菜屋さん、林のり子さんの家で、金沢から来たおいしいカレーやエビをご馳走になった時「来年、フードピヤによろしく」といわれているうちに、あっという間に一年経ってしまい、津野さんといっしょに出かけてきた。ふたりとも「ようわからんうちに」金沢まで行ってしまったのだ。

少しずつわかってくるにつけ、これはどうしてなかなか大がかりなものだという気がしてきた。金沢市内の料亭やレストランや飲み屋、三十軒ほどを借り切って、一軒一軒にゲストを招き何十人かで飯を食いながら話す「食談会」をやる。ゲストは、小沢遼子から北方謙三まで、「異越同舟」の極致のような人選。なぜか、ぼくと津野さんは、そうした責任がいっさいない、ただそこへ参加してればいいという「結構な」身分。

ちが大病になったのを看病するために百何十日病院通いをしたことはあるが自分がベッドの上の人になるとは――。

まだ、たった二日くらいなのに、病人食（それでも常食）の味のなさには驚いた。塩気が少ないのはもちろん、刺激物はいっさいない。生ま物もない。その癖、これまでとった四回の食事のうち二回に、わさび漬が出てきた。これは刺激物でも別扱いなのか。それならキムチが食べたい。そうか。でも考えてみると、わさび漬は塩分がないがキムチは結構塩っ辛いな。

ぼくが入院した翌日退院して行った林さんは「味覚が一番いい加減だと思つた」と話す。かれは口の中にはれ物が出て、その手術で二週間入院してたそうだが「すっかり病院食に馴れてうちへ帰って食べるものすべてが。から。すぎる。漬物におしょう油かけるのはもちろんのこと、おでんの辛子も

二日にわたって行われるのだが、一日目は、金茶寮という、市内でも有数の会席料亭へ出席した。ここは参加費二万円である。ゲストは大庭みな子。こちとらは、ただのかわりに選択権もない。八日市市の会席の話を思い出しながら（以前ここで紹介した、柿の葉や紅葉の葉を探しに行く人件費がついてるのではないか、という二万八千円の会席）おずおずと坐っていた。

しかし、魚やカニの類の多いこの地のこと、会席の方も、そうしたものを素材に使ったものが多くて、少くとも精進料理、普茶料理よりおいしかった。でも、やっぱし、向いてないなあ。

〈クマとシカとタヌキ〉

次の日、朝からバスで造り酒屋とお菓子屋さんを訪問。途中、剣町の吉田屋という料亭でまた会席料理。クマとシカとタヌキの肉を食べさせて貰った。シカは、北海道でルイベで食べたこと

ちょっとつけただけで、もう涙が出て来た」そうだ。ぼくも一月近く入院するから、そうなってしまうのかなあ。

〈生ガキとゆで豚〉

入院した途端に、自宅に外泊しに戻った。週末は検査はないし、手術は一週間以上もあとだし。そこでバックにされてはいるものの、生ガキを思い切り食べた。豚は、そのまま湯通しをして、もやしもそのあと湯通しをして、ナンプラー、酢、一味唐辛子を合わせたものをつけて食べた。シゲキブツのなんとおいしいことか。生シイタケはバタでさっと焼いて、これもそうして食べた。思うに、病院では、何百人もの給食なのだから、こうした「こまわり」がきかない。煮物一辺倒になるのもしょうがない。なんにもおいしいもの食べに入院してるんじゃないしな。

つまりは、病気になるないようにするのが一番か。

があるが、「タヌキ汁」もクマもはじめて。どちらも硬い、という以上の印象はなかった。それよりその場で焼いてくれたイワナがとておいしかった。造り酒屋では「お酒ができるまで」という大層なビデオを見せてくれた。誰が台本を書いて、誰がナレーターで、音楽は誰なのか、と思つたが、そんなクレジットはいっさいなかった。これぞPR映画の見本、ともいうような映画で（もちろん、ビデオになっているが）こういうのを作って稼いでいる人たちが健在なのだとか妙なことに感心していた。ただし、そのどこにも、そしてそのあと見せてもらった工場のどこでも、しばしば問題になる「防腐剤」を添加するシーンはどこにも出てこない。でも、大きなドラム一本から一升瓶六千本もとれるのが六本も並んでいる規模の造り酒屋だから、どっかで使っていると思うけど。

〈大野港の朝市〉

金沢の市場で有名なのは近江町市場だが、日曜は休み。しかしその日曜に港の方の魚河岸の倉庫で市が立っているというので、林さん一族や津野さんと帰る日の朝に出かけた。カニもなにもなるほど安い。大きな紅いカニが一匹四百円！しかし、持って帰るための発砲スチロールの箱が六百五十円。タクシー代が割勘でひとり二千円。中味よりそれに必要な経費の方がうんと高い、というのもおかしかった。

大阪の「主治医」のところへ寄って屋間からひとり二匹ぐらい食べてもた。あとで聞いたらその時いっしょに持っていた生まの蛸がゆでて食べたらすぐおいしかったとのこと。市の立っていた倉庫は、六月に釧路で大塚まさじがうたった魚市場跡と同じような建物で、そうか、あそこもかつてはこんな活況を呈していたかと、いさ

さか感慨深かった。

〈雪、また雪〉

北陸路は寒かったが、まだ雨だった。たまたまたまた黒テント公演と同時に期だった。(もともと今回はテントではなく、もともと少人数の赤いキャブレ「プロレタリア哀愁劇場」という演し物だった)

それから一週間して北海道へ行った。さすがにもう雪だった。そういえばちょうど一年前も北海道で、雪の中をワゴン車で札幌の周辺をうろろして、その時から「おしっこが近かった」の思い出した。持病だったのだ。

帯広では、最近引越した「ふるさと十勝」の編集部で、寝泊りさせて貰ったが、このタウン誌の事務所、なんと十年間で九回引越しているという。なんでそんな話になったか、というと、「エルパソ」のママの優子さんが「わたし、これまでに十八回も引越したわ」

といい出したからだ。同じところに二年ぐらいしかないわけだから、なかなかの「引越魔」だ。ぼくなんかも東京へ来てからずい分うろろしたし、戦災で焼け出されてからうろろしているのに、勘定してみたら十五回しかなかった。一番長いのが、生家の寺で十年と少々。もうすぐ今任んでいる上野毛が十年になる。次いで八尾の公団が十年をこそこだから、残りの三十年で十二回、というのは結構引越している方か。

帯広は北海道でも雪が少いところ。西の日高山脈が日本の雪を防いでいるそうだが、それでも十一月二十五日には粉雪がしんと降った。いや、二十四日から降ったのか？ 東京と違って一度降ると、そんなにすぐには溶けないで、見る見る風景が変ってしまふ。それでも、国鉄以外に公共の鉄道はないから、車のスピードが出せない

くらいで、あまり市民生活に突然の影響はない。もっともそこで暮らしていたら、野菜なんかてきめん値上りするのだろうが。

〈「料理のすべて」が本に〉

ここで宣伝をひとつ。

晶文社の「日常術シリーズ」の四回目に「男の炊事術」というのをよくが書くことになって、その多くの部分にこの連載を使うことにした。料理としないで炊事としたのは、その方がずっと「日常」的だからだ。

ベッドの上で、校正をしたり、レシビを書いたりしていると、二十年前を思い出す。いや違った、二十年前だ。その時も同じ時期に、結核の疑いで四十九日入院した。大学の五年生で、あとは卒論だけという時に、原因不明の発熱に苦しめられて、その大学の病院に入って、パウロフの犬のように、いろんな検査をさせられて、その揚句に

「気管支拡張症」という病名をつけられたが、その時ベッドの上で卒論を書いたのだ。提出が年明け早々だ、というので、さすがに焦って、いろんなこと——といつもわずかの——資料を持ち込んで、まさに「でっち上げて」しまった。「明治初期小学唱歌の研究」というのがそのタイトルだが、すぐあとで、東大で同じような研究をしている人がいるのを知った。それが山住正巳さんで、かれの方はちにそれが立派な本になった。ぼくの方は「音楽をやっていたら、先生もあまりわからな

いだろう」とたかをくくってのことで、ただどでき上って諮問の時には、しっかりといじめられて、結局「可」しか貰えなかった。

それでも、なんののかんのかんといっても、ぼくの場合は、それがなんらかの形でついてまわっている。日教組の「国歌を考える会」では、悠治さんのピアノ

で、北田カオルの歌という組合せで唱歌をやったりしたのである。

あっちへ行ったり、こっちへ行ったりして、それでいて結局、ひとつところをぐるぐるまわってきているのだろうか。

それにしたら、これまたもうひとつの宣伝になる。十二月中旬に出るミステリーのほん訳、ジョセフ・ハンセンのデイヴ・ブランドステッターのシリーズ「砂漠の天使」は、それこそ二十七年前のベッドの上では、夢想だにできなかったことだ。

今から二十七年たった時——七十八歳！生きてるかなあ——今度はどんなことしてるかな。やっぱりベッドの上で原稿書いてたりして。病人食だけは相変らず、塩分も刺激物もない、味のないものだろうな。そういう意味では、いつも変らないもの、は根強く生きのびていくのかもしれない。

「カフカ」 ノート 高橋悠治

11月の末に銀座の画廊で「カフカ」を再演するまえに、手直しする。これが何日もかかって、やってみると、ほとんど全面的改定になる。しかも結果には満足できない。この曲は「進行中の作品」という悪夢になりつつある。

シェーンベルク以来のヨーロッパ風現代音楽の音から手を切りたい、と思っている。すくない音数のなかで、一瞬のうちに影と光が移ろうような、ただよう音色の波を手にした、と思っ
ている。それらを紙の上でなく、音として直接つくりたい。書くことは、結局のところ一番経済的な伝達手段ではあっても、そこからはじめることは身

は、たくさんを知った。水牛の活動のなかで、ともだちと敵をつくった。水牛楽団をほとんど七年やった。

三年前から三宅榛名とデュオを組んだ。即興演奏が、またできるようになった。ジャズのプレーヤーたち、ニューヨークからきたインプロヴァイザーたちといっしょのしごとをした。

その頃から、いまレコードになって
いる、あらゆる種類の音楽をきいた。
世界のどこで、だれがどんな音楽をや
っているかを知った。たいしたことは
起こっていない。みんな自分をくりか
えしている、ますます声高に。おもし
ろい音楽もたくさんあるが、やりたい
ことは、そのなかにはない。

ヨーロッパやアメリカには十年以上
行っていない。アジアにもしばらく行
っていない。東京にいれば、何でも
輸入される。だが、バランスはどこ
か狂ってくる。十一月にフィリピンに

につかないような気がする。ただ、何
かが手につく、ということ。即興的
にできる範囲にはないようだ。厳密な
作法による訓練の段階を通らないと、
自己流のいいかげんになってしまう。
とは言っても、既成の型があるわけ
もなく、そんなことにはいまさら何年も
かけてはいられない。

出口なしの状態で、突然ひとつの解
決に思いいたった。セットになってい
る各曲を解体して、ひとつのファンタ
ジーの不連続な夢のなかに、物語とは
無関係に、構成要素としてモンタージ
ユする。あたらしい結合のなかで、具
象的な意味づけはこわれて抽象化する
と同時に、手仕事から距離をおいて、
展望を回復する可能性もある。

この、自家製リサイクルの結果は、
またいずれ。

今年も終わりに近い。ここで決算表
をつくっておこう。

行って、それがわかった。ちがう風景
とちがう時間、これらは輸入できない
ものだ。

いまやりたい音楽は、以前からやっ
ていたことと別なものではない。一九
六四年ベルリンで、ピアノ曲「クロマ
モルフ2」の確率計算の結果としての
気まぐれなメロディー、4つのヴァイ
オリンのための「6つの要素」のゲー
ムのなかでのドローンとメロディー、
リズム・パターンとの連鎖反応。一九六
八年ニューヨークで、オーボエのため
の「オペレーション・オイラー」のグ
ラフ理論によるモードの再構成と音の
スクリーン。「きみたちにこの歌を」
(一九七六年)のヘテロフォニーと、
歌のメロディーの変形。「七つのバラ
がやぶにさく」(一九七九年)の十八
世紀ヴァイオリン奏法での、自作のメ
ロディーのラーガとしての展開。こう
した獲得物のカタログから、理論や計

一月の病氣と、半年間のしごとの中
断のなかでかんがえたことは、しごと
を再開してみると、あまり生かされな
かった。また流されはじめている。他
人のためのしごとが、自由な時間を埋
めていく。だれでもが似たようなこと
をやり、同じレベルで仕事をしている
時代に、孤立していることはむつかし
い。ポストモダンも反体制も左翼も、
山谷にはいることでさえ、おなじこと
ばづかい、おなじ顔つき、集団と流行
の、国家主義の装飾としてのありかた
を出ることができない。このなかで、
どうやって自分ひとりであられるか、
自分をくりかえさずに、ますます自分
になっていくなから(老子の意味で)
無名性にいたるか、想像がつかない。
そして、想像して済ましてしまうこと
自体、まちがっているのだろう。

この十年間、音楽をすこしずつ放棄
してきた。一方で、現実世界について

算の足場をはずし、伝統文化の成果を
利用するかわりにその起原の極を通過
して、構成の次元から夢の自由な使用
法に移ること。これが、今後数年の課
題だ、と言っておこう。

現実問題として、あれこれのコンサ
ートの企画をたてることに時間をとら
れている。これからはバンドやデュオ
ではなく、まずひとりだけで何ができ
るか整理してみなければならぬ。そ
の上で一時的な協同作業も可能だ。出
会いから何かあたらしいものが生まれ
ることは、ほとんどない。いろいろな
ことをやって時間がなくなってしまう
よりは、目標をはっきり見さだめて、
よけいなことはやらないようにしたい
が、なかなかそうはできないだろう。
とりあえず、東南アジア音楽につい
てのマセダの論文集の翻訳と、ピアノ
のコンサートが3回できるだけのレバ
ートリーの準備が最優先する。

走る・ その十一 デイヴイッド ・グッドマンド

はさまれて走っている。背後はミズ
ーリ州、向こうはイリノイ州。鉄橋は
ミシシッピ河にかかっている、その二
つの州を結んでいる。三〇年代に公共
事業として建設されたこの橋は二車線
しかない、歩道もない、せまいものだ。
トレーラートラックがイリノイから煙
を吐きながらびゅんびゅんやってくる

い舗装のうえで陽炎が燃えている。カ
ーブを速く曲がりすぎて傾いているぼ
んこつ車がやってくる。ぼくはしかた
なく路肩におりる。運動靴の下で砂利
はぎしぎしいうし、すなほこりもたつ
橋をおりてきたときには気がつかなか
ったが、ここからだ、こわれた洗濯
機、古いタイヤの山などに囲まれた家
が一軒見える。洪水のとき、どうする
のかなと考える。

鉄橋にさしかかる。向こう側にはハ
ニバルの町が見える。埠頭には外車汽
船のようにしつらえたジーゼル船が付
いている。きのうその船に乗って、ミ
シシッピを一時半ほど観覧した。上
甲板で日射を浴びながら、ホットドッ
グを頬ばって、ポップコーンをばりば
り食べていたヤエルとカイは、汽笛に
驚いて耳をおさえるのだった。河畔に
「インディアン」が現れて船にむかっ
て矢を放ったときも、キャーと悲鳴を

と、ぼくは蟬のように青緑色の鉄骨に
しがみつくほかない。錆ついた鉄骨、
ひびわれたアスファルト。

モーターを出たとき、河を渡るつも
りはべつになかった。が、幅が二キロ
もある大河にかかっているこの橋を見
たとき、足は自ずと河のほうに向いた。
橋はやや険しい傾斜になって、向こう
岸まで走るのをしんどく思ったが、水
面に光る朝の日ざしも見たいと思っ
たので、ついに橋の斜面をのぼりはじめ
た。

真下に、渦を巻きながら、大河はゆ
っくり流れている。沈殿物でどろどろ
のミシシッピが「ビッグ・マディー」
(大泥)というあだ名で知られている
所以がわかる。風が髪を乱す。イリノ
イのほうに下りはじめる。

十五、六のとき、ぼくは船大工にな
ったつもりで、うちの車庫で五メート
ルのモーターボートを造り、ミシシッ

あげて喜んだ。

埠頭のむこうには、ハニバルの町の
中心になっっているマーク・トエーン
の家が見える。「トム・ソーヤーの冒険」
や「ハックルベリ・フィンの冒険」
にも出てくるその家は今や博物館とし
て保存されている名所である。きのう
「外車汽船」をおりてから、全員でい
ってみて、意外におもしろかったが、
マーク・トエーンの商品を一冊も読ん
だことがないぼくは恥ずかしくなって、
向かい側の本屋に駆けつけて「トム・
ソーヤー」と「ハックルベリ・フィン」
のペーパーバックを一冊ずつ購入し、
ヤエルには「トム・ソーヤー」の絵本
を買ってやった。

いまぼくが走っているこの橋をくぐ
って南方に河をくだったところにトム
・ソーヤーと彼の幼い恋人のベッキ
・サッチャーが迷子になった洞窟があ
る。きょうこれから子供たちをつれて、

ピをくだる計画をたてた。ミシシッピ
の河川管理を担当する陸軍工兵科に手
紙まで書いて、航行チャートを送って
もらった。ウイスコンシンの西の州境
を画するミシシッピにモーターボート
を進水させて、ニューオリオンズまで、
河を二〇〇キロくだるつもりだった
のだが……

と思いだしながらイリノイにたどり
つく。イリノイ側は殺風景。イースト
・ハニバルという交通標識はあるが、
町などどこにも見当たらない。高い断
崖がつづくミズーリ側とちがって、こ
こは氾濫原。雪解けのときとか豪雨の
とき、水位が四メートルも高くなるこ
ともあるそうだ。背の高い樹木は少な
く、ひくい草木が一面にはびこってい
る。しばらく走ってみるが、風情がな
さすぎるから、引き返して、いま一度
鉄橋に向かう。

まだ朝の八時だが、すでに暑い。黒

一時ジェシー・ジェームズの強盗団の
隠れ家でもあったその巨大な洞窟の中
を見ることになっている。

鉄橋の上から広大なミシシッピが左
右に広がっているのを眺める。ハック
・フィンが奴隷のジムとともにいかだ
に乗って、自由を求めてくだったのは
この河だ。ドレイカ。南北戦争のとき
マーク・トエーンは北軍ではなく南軍
に志願したそうだ——わずか二週間で
退役したらしいが。「ハックルベリ・
フィン」を書いたマーク・トエーン、
南軍に志願したマーク・トエーン、「
アメリカ文学界のリンカーン」と呼ば
れた国民的作家トエーンはいったいど
ういう人間だったのだろう。

だが、新学年がはじまるまえの、夏
休み最後の、せつかくの遠足だ。あま
りむずかしいことは考えないで向こう
ぼくはどうやらこのせまい橋を無事に
往復できそうだし。

編集後記

十二月。ことしは高橋悠治の前立腺炎ではじまり、田川律の前立腺肥大手術でくれることになってしまいました。でも田川さんの手術はおもったよりは軽くすむようで、これが発行されるときにはすでに退院している可能性も高いのですが、来たるべき年はぜひとも元氣になって迎えてほしいものだとも思います。

「キリコのコリクツ」は今月でおしまひ。ファンの方々、がっかりなさいませ。来年はマンガが登場するかも知れませぬゆえ、むしろ、より一層の御支援を。書きためたコリクツは一冊の書物となって世に送りだされることになつていきます。今年中にその編集を終える予定だと聞きましたから、来年は

じめには完成するのでしょうか。

ほんとは来るのかどうかと一方的に氣をもんでいたカラワンは、3日に当然のごとく到着して元氣な顔を見せてくれました。ヤキモキしながら、結局一年に一度はこうして会って、もう5年になりました。今回はアメリカとフィンランドのコンサートのかえりなので東京にいるあいだに、そのあたらしい体験のはなしを聞くのを楽しみにしています。

キリよく、来年いっぱい、つまり通巻百一号まで発行して終刊とします。そう決心してみると、これからの九一年はわりあい長いものを感じられてくる。おわりの年のはじめの一号は、藤本和子さんの「動物取り締め官」。一号分ぜんぶが藤本さんのお話で埋まりまふ。水牛にとってはひさしぶりの長い物語。いつもと趣向を変えて、刺激的に最終年のスタートをきる。(八巻)

* 予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会

口座番号 東京四一九一七九二

購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)

住所 氏名、電話番号、何号からと明記。

* 本誌は次の書店にあります。

模索舎(新宿) ☎三五二一三五七

ブックイン(阿佐谷) ☎三三〇一七八九七

信愛書店(西荻窪) ☎三三三三四九六一

ワンラブブックス(下北沢)

☎四一八三〇二

アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)

カンカンポア(西武渋谷店B館B1)

ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)

名古屋ウニタ書店 ☎七三二一三三八〇

水牛通信 第八巻第十二号 一九八六年
十二月十日 定価二〇〇円 発行人 堀
田正彦 発行所 水牛編集委員会 〒154
東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方
電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座
東京四一九一七九二 印刷所 佛トライ
プリントショップ